

Ⅶ アンケートの結果について

昨年末から本年1月末にかけて、全会員を対象として実施したアンケートは、熱心な会員86名の御協力により、貴重な御意見、御希望を聞くことができました。ここにその総括を掲載し、今後の研究会の方向づけに役立てたいと思います。

なお、ここに述べられた考え方に対する御意見をお持ちの方は、どうぞ遠慮なく事務局宛寄稿下さるよう希望します。紙上討論の形式で次号に掲載したいと考えております。

1 会報について

1) 内容

- 外国で開発された新測器の紹介（現在わが国で類似したものが開発されているかどうか等）を詳細に知らせて欲しい。—— 広瀬寛（日魯）
- 学会誌ではないので、研究者のみではなく、水産一般人にも親しまれるような構成を常に考えて載せたい。 浜島謙太郎（長崎水試）。
- 数多くの調査船、試験船があるので、その成果を迅速に盛り込むようにしては。
河田和光。（水産庁）
- シンポジウムの記録のみではなく、総説のようなものを載せてもらいたい。 （海洋研）
現在の方針で結構だが、総合報告的なものを希望。—— 川上太左英（京大・水産）。
- 研究会の抄録はなるべく簡単明瞭に、要点だけ分るように。 不明氏。
- シンポジウムの出席者名（所属団体とも）を掲載して欲しい。又年2回だから出来るだけのものは網羅してもらいたい。 不明氏。（大洋）。
- シンポジウムの雰囲気がよく反映して結構だと思ふ。—— 林 繁一（南水研・清水）。
- シンポジウムや座談会の報告を中心とした内容は、学会誌等の研究報文中心の雑誌と異なり、特色があつて面白い。—— 田中昌一（海洋研）。
- 話題提供者の要旨はできるだけ簡略化し、相互の考え方に対する討論を十分掲載して欲しい。見ず知らずの人達が遙か彼方で話し合っている場合が多いので、単なる質疑ではなく、5~10行の内容が掲載されると良く判断できる。不明氏（余市消印）。
- 話題提供者全ての報文が載らないのが残念である。シンポジウム・座談会を中心にした編集は大変良い。—— 黒田 紀（神戸海洋）。
- 沿岸重要資源のうち、比較的全国的に関連するイワシ・サンマ・サバ・スルメイカなどについて、その年度の漁況、海況の特筆事項、経過概要を年の締めくくりとして、定期的に（年2回のうち、後期の方に）掲載して欲しい。同一海況がスルメイカに悪くサンマには良いという事が、地域的にどの程度起り候るものかの判断に役立つと思ふ。不明氏（余市局消印）。

- 研究会は学会と異なると考えられるので、なるべくディスカッションのできるような内容としたい。不明氏。(中野局消印)。
- やはり巻頭言をつけて、本会の存在理由なり、目的なり、性格なりを常に角度の違った見方から指標して頂きたい。不明氏。
- 沿岸の水産海洋と沖合の水産海洋と、会報1冊の内でも分けて編集しては。不明氏。
- 出来るだけ早く本印刷にすること。(ほぼ同時に発刊した「沿岸海洋研究ノート」は、すでに立派な学術誌になっているようだ)もし主旨が異なり、これまでの方針をどうしても続けるようなら、別に少くとも良いので、本印刷の専門誌を作成して、本当の論文を発表できるようにしてはいかが。不明氏。
- あまり末端的な漁況ニュースあるいは海況速報みたいな記事は掲載して欲しくない。やはり研究会であるから、海況あるいは漁況ニュースをどう解釈し、どう予測に結びつけていくかという、基本的な物の考え方に連がるどころへ話をつないで欲しい。

2) 発行回数

- 年間2回の会報では少し淋しい気がする。費用もかかるだろうが、年間3~4回位の発行が望ましい。不明氏。(静岡水試・伊東)。
- 年2回の発行を維持し、内容の充実を図ってほしい。記事、報文が多くなるようなら回数を増やしてほしい。——黒田一紀(神戸海洋)。
- 年4回にした方が一層有意義だと思う。もちろん、経費・労力・原稿・その他いろいろ問題はあと思うが、——三谷文夫(西水研)。
- 年間になるべく多く発刊されるよう進めていっていただきたい。

3) その他

- 印刷が少し読みづらいように思う。特に図に見にくいものが多い。これは寄稿者がいけないのか、印刷が悪いのか分らないが、編集委員によって善処を。三谷文夫(西水研)
- 印刷・紙質が良くなればと希望する。不明氏。(兵庫水試・但馬)。
- 頁数は少くとも活版印刷になって、且紙質の向上すること(写真や図表が明瞭になること)を希望。不明氏。
- 総務・編集委員諸氏の御努力を深謝し、続刊を希望する。不明氏。(千葉水試)。
- 今の処、年間会費に比し、内容の充実は他機関の雑誌類を圧倒しているように思う。現在のペースを続けると、会計的のどうかなどの危惧もある。若干の会費アップも止むを得ないのではないか。——佐藤裕二(東北水研・八戸)。
- 研究試験機関に属していず、直接明日の糧を求める沿岸漁業者に接する者にとって、その活動は全くブラフティカルな職人の技術の吸収と、早く金になる技術導入等に明けくれ、水産海洋の立場に立って水産をみるということがおろそかにされることから、この会報は全く新鮮な空気のような。阪本俊雄(高知・幡多事務所)。

- 他の会誌で見られない生々しきがあり、有益になっている。不明氏。
- 現在程度が永続するよう努めて頂きたい。不明氏。

2 シンポジウム・座談会のテーマ・企画について

- 内湾の交流（海水交換）の促進。——川上左太英（京大・水産）。
- 夏季における無酸素層の挙動と水産への影響 “ ”。
- 海底耕耘の底棲生物への影響。不明氏。
- 沿岸の海況・漁況の変動要因の解明のための（漁海況予報事業に関連して）徹底的基礎研究が望まれるが、その方法論について。不明氏。（京都水産）。
- 海洋の生産量とプランクトン分布について。 “ ”。
- 日本海のアジ資源について。 “ ”。
- 「ブリ資源・漁況と海況に関する座談会」ブリの漁況に関する問題は最も古く、また常に新しい問題だと思ふ。漁業者にも熱心な人が多いから、主要な漁場数カ所で組織的に開いて（例えば、小田原・尾鷲・高知・長崎・富山）特集号を出せば素晴らしい。三谷文夫（西水研）。
- サケ・マス海中蓄養、ハマチ・エビの養殖等の蓄養関係迄、水産海洋という名前にこだわらず取り上げて欲しい。広瀬寛（日魯）。
- 新漁場を開発することが業界で大きな問題となっており、これに関し是非シンポジウムを開いて早急に検討し、会としての考え方なり、研究方向を打ち出しては。不明氏。（大洋）。
- 漁業資源別シンポジウムは毎年検討会という趣旨で開催し、毎年その認識と研究発展方向をつかむようにしては。——河田和光（水産庁）。
- 水産海洋はそれなりの独自性をもっており、従って独自の発展をすることは必要であるが、時には基礎的研究のグループ（生態学者等）との座談会を持つのも良いのではないか。IBPの問題なども時には取り上げて、水産という面から検討してみたらと思う。田中昌一（海洋研）。
- 現在の巾広い企画をますます発展させたいと思う。林繁一（南水研・清水）。
- 開催場所の地方への持ち廻りができたら、その地方の水産海洋の諸問題というようなテーマで行って頂きたい。不明氏。（兵庫水試・但馬）。
- 漁場老化防止について。——菅原兼男（千葉内湾水試）。
- 貝類の異常斃死について。 “ ”。
- 水研と水試では、漁海況の予報を実施するために必要な、独自のシンポジウムを基本的応用面をも含むテーマで続けている。そこで問題になるのは、常に生物と環境の関係と言える。その関係を具体的にするのに、水産研究者は、研究対象の資源を構造的にとらえるのでなく、それを形づくる魚・海・生産と言った概念としても、科学的に区別できる分野の相対的な独立のなかで、関連しあった研究の発展を計り、統一しようとしている。このように“海”の問題を統一的にとらえて、海況・漁況の予測を発展させるには、是非広い分野の研究者の討議・交流が必要だと思ふ。具体的には、それぞれ相対的に独立している研究会や学会などの組織が

実施する多くの共通する問題のシンポジウムなどを、どう統一して、開花をはかるかということの討論を是非望む。不明氏。(東海水研)。

- ただ会報を通してのみ接触のある地方在住の私には、各回それぞれ広い方面にわたっての記事があり、大変勉強にもなり、また会報の発刊が楽しみに待たれる。サケ・マス・マグロ・クジラ等については、かなり定期的に座談会が持たれているようだが、沿岸漁海況についても定期的にやっていただきたい。(例えば東海区のカタクチについてのようなもの) —

小川嘉彦(山口外海水試)。

- Detritus について。不明氏。
- 水産海洋の研究投資が、やがて経済効果としてはね返ってくるという幾つかの試算について、多くの人に、特に大蔵官僚・代議士等にピンと来るような話題提供者を探して企画してみてはどうか。不明氏。
- 海の諸現象を披露し合う寄合をもっては、特に定量的に法則性を表示出来るようになることが、水産海洋学の指向する焦点ではないかと信ずる。
(宇田博士が永年に亘り組合や漁夫から聞き取りしておられるが、それを公表していただいては)不明氏。
- 今後、各地区幹事決定の上で、各地区においても座談会・シンポジウムを大いに開かれるよう望む。不明氏。
- 水研・水試・大学などの研究者を主体として、学会発表以前の問題、たとえば方法論、理論の根拠などについて、ざっくばらんに突込んだ討議ができるようなシンポジウムを企画して欲しい。不明氏。
- テーマは現状で十分で、むしろ環境面の「現象の整理」を通して「海洋の働きかけ」を煮詰め、更には環境パラメータの持つ意味と限界を討議して頂きたい。出来れば結論(問題点を含めて)的集約が欲しい。不明氏。
- 多分野多方面に亘るニュースや情報を沢山集めることには大賛成。そして、それをどのように整理してその情報群の中から「何」を捕えるかという方法や手段を考えること。不明氏。

3 会の運営について

- 地方には、まだまだ会の存在・内容などが知られていない。もっとPR(例えば水産・海洋学会誌などによる)をして戴けば、もっと発展できると思う。— 佐藤裕二(東北水研・八戸)。
- 関係報告書資料の収集を積極的にして会報にでも載せて欲しい。— 河田和光(水産庁)。
- 会長のワンマン研究会のような所があるので、はやく執行部を確立して、会長の仕事を実質的に補佐できるようにする必要がある。例えば情報などは殆んど会長1人で書いておられるが、情報を集めて原稿を書く役目などを考えてはどうか。— 田中昌一(海洋研)。
- シンポジウムや座談会が、とかく関東とくに東京中心主義になりがちだが、地方在住者にはそれに出席する好機はまずない。これは、ひとり本会に限らず、殆んどすべての学会においてそ

の傾向が最近著しいが、何とかならないだろうか。もっとも、地方で本会独力でシンポジウムなどを開くには、まだ力が足りないと思うが、何かの機会に共催ぐらいはできると思う。

三谷文夫（西水研）。

- シンポジウム開催の折に、所属団体の長に所属団体の会員名も付して是非出席するように出して頂くと、出張・出席がしやすくなるのでよろしく。不明氏。（大洋）。
- 会費を上げないで欲しい。— 黒田一紀（神戸海洋）。
- 役員の方々の御苦労十分察せられるが、一応今のままで結構。地区幹事の分担業務を明示しては。不明氏。
- リラックスな会の雰囲気を作って頂きたい。われわれのようなバカでも気軽に発言できるような雰囲気が欲しい。不明氏。

4 漁海況など水産海洋的ニュース

1) 三陸沖のサバ・スルメイカ漁

異常冷水問題に関連して注目されたサバの38年級群は、今秋八戸沖まき網で多獲されるどころとなり、どうも騒がれた程実際の影響はなかったのではなからうか。

41年スルメイカ漁は例年になく漁期が続き、この分だと年を越して1月まで延びそうである。この現象は珍らしい。

佐藤裕二（東北水研八戸支所）

2) 瀬戸内のマダコ漁

- ② 41年10月よりマダコの漁獲が殆んど零となり、その原因について瀬戸内海東部3県のそれぞれ手持の資料の分析の結果、この原因は9月以降の塩素量の低下であろうと結論された。香川県の資料では、10月の播磨灘・備讃瀬戸東部の塩素量が16.5%まで低下した。これは同県の観測値の最低値であった。

小野知足（香川水試）

3) 大西洋でミナミマグロとれる

1965年11月15日、 $37^{\circ}20' S$ 、 $08^{\circ}53' E$ 及び11月17日 $40^{\circ}09' S$ 、 $02^{\circ}30' E$ の2点で水産庁調査船照洋丸により、恐らく世界で初めて大西洋においてミナミマグロの漁獲を記録した。その時の表層水温は $13.1^{\circ}C$ と $10.4^{\circ}C$ であった。インド洋で通常商業的に漁獲されているものよりも小型であった。

河田和光（水産庁）

4) 対馬の寒イカ漁

対馬方面の寒イカ（スルメイカ）漁は不漁のまま終りそうだ。毎年12月～2月上旬まで、山口県沿岸から夏季カタクテイワシ漁に従事する棒受・縫切をはじめとする漁船が200隻程対馬東岸海域でスルメイカー本釣に従事するが、今期も昨年に続き不漁のまま終りそうな様

相を呈している。各船ともまだ対馬に行っており量的にははっきりつかめないが、まとまった漁をした船は少ないようだ。水試の黒潮丸も12月中旬・下旬・1月中旬と探索に出航したが、12月18日山口県見島の沖で110箱漁獲したのを除き、まったく漁獲が得られなかった。ただ情報によると青森県方面から来ている大型船ではかなりまとまった漁を続けているということだが。

小川嘉彦（山口外海水試）

5) 九州近海における海況並びにブリ漁況について

昭和38年九州近海では11~13℃と記録的な低温を示し、非回遊魚類並びに狭温性魚類の温度死が多量に発生したことは記憶に新しい。この異常現象はその後各部に余いを残し乍らも時間の経過と共に回復し、40年には殆んどこれの痕跡は消失したものと考えられていたが、41年末から42年初めにかけて九州近海ではこれに類似した現象が観測されている。即ち陸上の厳しい冷え込みもさる事乍ら、九州沿岸水域では例年より1~2℃の低温を示し、38年の異常低温時のそれと略近い数値を示している。

一方これに伴い、秋頃から見られるスルメイカを始めとし、ソーダカツオ、メジ類は不振を極め、殊に定置網によるスルメイカの不振は38年のそれを大幅に下廻っている。

又これらと略同時期に見られるブリ漁においては記録的な不振を示し、2~3月にかけての盛漁期の漁況が憂慮されている。

大洋漁業・定置網における五島・対州12月ブリ漁獲尾数

五 島		37年	38年	39年	40年	41年
(8ヶ統)	ブリ	1292	1780	2810	7081	197
	ワラサ	4046	1617	919	518	902
対 州	ブリ	9658	841	5784	6968	985
(5ヶ統)	ワラサ	311	1366	48	126	102

(註) ブリは5Kg以上、ワラサは5Kg以下

このように今期の不振は記録的なもので、これが海況の好、不況に因を求めることには甚だ危険性が多い乍らも既に現われつつある海況の変動、漁況の変貌は見逃がせぬところであり、今後の海況、漁況に十分注目したい。

寺川富夫（大洋漁業・長崎支社）

6) 土佐湾でカタクチイワシ稚魚（シラス）大漁

昨41年12月土佐湾西部で史上最大のカタクチイワシ稚魚（シラス）の大漁があった。その数は田の浦漁協において、過去同月7カ年分にあたる274,400Kgであった（34~40年平均は38,651Kg）。

田の浦漁協におけるシラス漁獲高 (Kg)

	9月	10月	11月	12月
昭和34年	7,175	44,360	21,190	35,458
35	1,570	83,080	45,940	54,465
36	8,920	47,660	64,500	31,950
37	4,340	14,560	23,861	114,470
38	350	330	13,480	9,715
39	29,090	66,040	43,890	8,270
40	26,720	24,990	25,120	6,230
41	9,050	16,360	31,641	274,400
34~40年平均	11,163	40,145	33,998	38,651

なお、昨年は土佐湾全体においてシラスの大漁であったようだ。

阪本俊雄 (高知県幡多事務所)